

「抽象的世界」では、ティーセン理論、空間的拡散のシミュレーション、中心地理論、およびフラクタル理論といった計量的手法を過去の集落や空間的行動に適用してモデル構築を試みた事例が紹介されている。ここで取り上げられた史料や計量的手法の選択基準が各節冒頭で鮮明にされていれば、歴史地理学が目指している地平に対する読者の理解が一層深まったと思われる。

本書は、以上のように多岐にわたる内容を250頁という限られたスペースに盛り込んだだけでなく、本質論の多様化を構成に反映した点で特色のある良書である。座右に置くべきハンドブックとして推薦したい。本書の刺激を受けて、歴史地理学に関心を持つ熱心な学生や社会人のファンが増え、研究成果が次々と報告されることを心から期待したい。

「はしがき」で述べられているように、本書は最新の研究法を網羅しているわけではない。たとえば、近年の特色ある動向とみられる花粉分析による自然環境の復原、GISをはじめとする情報処理技術の応用、国外の資料や地域を対象とした研究成果などについてはふれられていない。このことは本書の不足というより、むしろ歴史地理学における新たな試みが積極果敢に行われている状況を示しているといつてよい。隣接分野の『…ハンドブック』のように本書も改訂を重ねて、新しい研究法がそのたびにアップデートされることを望みたい。

(川口 洋)

P. ジャクソン著、徳久球雄・吉富 亨訳：『文化地理学の再構築 意味の地図を描く』(Maps of Meaning: An introduction to Cultural Geography

玉川大学出版部 1999年11月

A 5版 268頁 本体4,500円

目次

序論 意味の地図

- 1章 文化地理学の遺産
- 2章 さまざまな問題と代替案
- 3章 文化とイデオロギー
- 4章 民衆文化と階級の政治力学
- 5章 ジェンダー（社会的性差）と性意識
- 6章 人種差別の言語
- 7章 言語の政治力学

8章 文化地理学の課題

本書は、D. グレゴリー監修による、新しい人文地理学の地平を開拓するシリーズの一冊である。序において、著者ジャクソンは、「文化研究のもっとも重要な思想と最近の人文地理学の発展とを組み合わせ、従来の景観に対する執着からはなれて、それに代わる文化地理の研究手法を採る」と述べ、本書の立場を鮮明に示している。そして、文化が政治的なものであることに注目し、社会科学の諸理論と交流することによって、文化地理学の新たな像を結ぶことをめざす。

1章では学史をふりかえっている。パークレー学派とくにサウアーの文化地理学が文化を超有機体とみるクローバーの文化人類学に依拠していること、その後の自然・人文両方向への文化地理学のさまざまな展開と、文化が人間の行為によって形成されていくという認識の共有が進んだこと、しかし人文方向では文学や自然思想や意識といった人間に主題をすえた人文的探求に過度に傾斜して、社会関係の分析つまり社会科学的関心を軽視してきたことを指摘し、文化地理学を、社会地理学と関心を一本化させて社会科学のなかに位置づけていく必要性を主張している。

2章では、まず、物質的環境から抽象化された「文化」を、安易に思想や現実行動の説明要因とみなす文化主義（例、ヒスパニックの人々は文化的に過密住宅を好む）が、現実が抱える諸問題の分析や解明を不十分なものにする欠点・危険を指摘する。文化主義においては「文化」がブラックボックスとして扱われ、思想や現実行動の背後に潜む本質から目をそらせ、思考停止を余儀なくする。それは、往々、現実世界において政治性を含む諸問題や社会関係に規定された諸問題を「文化」の名のもとにカモフラージュする効果をもつ。

そのような文化主義の限界を開閉する鍵として、物質的条件・社会経済的条件・生産関係などを説明要因とする文化唯物論に依拠した文化研究の必要性を主張する。そして、文化唯物論を模索したR. ウィリアムズの研究を検討し、社会経済史に従属する単純化された「文化」ではなく、個々の歴史状況のなかで、生活全般にわたって現れている有意の仕組みとして文化を提示できる研究可能性がきりひらかれたこと、しかもそのような文化唯物論研究がコスグローブ、ダニエルズ、

スリフトらによって着実に進められていることを紹介している。

ひきつづき3章において、ジャクソンは、文化とイデオロギーとの関係について考察を進める。イデオロギーとは「利害関係を隠蔽し、支配階級の利害関係を社会全体の利害関係に転化することによって、社会矛盾を否定し、その社会の再生産に重要な役割を果たす思想」であり、同時に、人々とそのまわりの世界との間の「生きた関係」として具体的な物質的結果をもたらすので、特定の空間と時間に沿って捉えることが必要であると述べる。その上で、現代社会におけるイデオロギーにおいて、経済的・政治的戦術と同じく文化的戦術が重要な要素になっていることを、「中流階級の都市回帰による都心部の再生」に関する肯定的な諸論調を例に用いて示している。本来都市空間の再開発とは、居住をめぐる階級構造や利害関係、あるいは公的費用等もふくめた社会的コストなどの検討が必要なテーマであるはずなのに、多くの論調は、事前に中流化を歓迎し、再開発の公共的必要性すら語る。

ジャクソンは、このような支配的イデオロギーの批判的検討の必要性を主張し、ついで、世界各地における支配的イデオロギーへの抵抗例を紹介する。スキンヘッドやフリーガンやギャングの縄張り争いといったなじみ深い例を挙げて、これらの抵抗活動が限定された社会空間でのみ足場をもち、経済的方法や政治的方法で現実的に問題を打開できないためにこのような文化的・象徴的手段がとられることを指摘するとともに、これらの抵抗活動が発する文化的シグナルの正しい解釈には、詳細な民族誌や歴史的分析が不可欠であり、無批判に活動のシンパになるのではなくオンブズマンの姿勢を堅持することの必要を説く。

ついで、4章から7章にかけて、ジャクソンは、民族誌や歴史的分析を活用して、支配被支配、ヘゲモニー、差別に関する文化地理を具体的に展開する。つまり、民衆文化、ジェンダー、人種差別、言語をとりあげ、それらの政治力学や社会構造を具体的に分析している。4章では、19世紀ヴィクトリア朝における都市労働者階級の民衆文化台頭に対してブルジョアジーがヘゲモニーを守るために行った種々の社会規制、とくにミュージックホールや街路などの空間の規制を扱ってい

る。

5章では、アメリカ開拓史や雇用や売春にみられる女性観やゲイの活動が示すジェンダーの文化地理的諸問題を提示している。家父長制に基づく文化とそれへの挑戦が歴史的にも現状についても空間現象として確認される。

6章では、人種差別つまり人種による階級の違いの確認が、17世紀以来繰り返されてきたことを検証している。イングランドを対象にして、差別の再生産の歩みを、報道や学問を含む広義の言葉の分析によって明らかにしている。その上で、ジャクソンは、人種差別の文化地理が、移住・居住・雇用・教育・街の問題など、生きていく上でのあらゆる活動・行動を対象としてなされるべき研究であることを主張する。

7章では、言語が有する政治力学の分析を、文化地理学の課題として提示する。ジャクソンは、言語共同社会の生成とは、社会集団が自己確認し、他の集団と自らを区別することを意味し、言語区分とはそのような政治力学を地理空間として研究することとみなす。このような研究が確実に成果をあげ、さらに広範な言語理論を駆使してJ.パージェスらの研究やコスグローブらの研究が進展して、新たな研究可能性が切り開かれていると展望している。

最終章8章はまとめの章である。本書でジャクソンは、「文化」の特性の具体的な目録作りに終始した閉塞状況から文化地理学を解放し、文化を扱う諸分野の研究動向と軌を一にして研究を進展させる必要を主張し、模索してきた。さらに最近の研究動向で注目すべき、解釈学的な文化研究やポストモダンの様々な試みに言及し、文化地理学においても多様な研究可能性が探求される必要性を主張する。ジャクソン自身は、文化の社会的・政治的構造に重点を置く理論的な見方を追究する立場から、不均等発展理論、労働の空間区分、社会関係と空間構成との相互作用の3つを、今後の文化地理学の中心的課題として提起し、本書を締めくくっている。

以上の本書の立場は明瞭であり、原著が出版された1989年以後、日本においてもジャクソンの主張に沿った研究例が散見される点からも、本書は文化地理学と社会地理学との接点において主導的な役割を果たした書物と評価できよう。

しかし、サウアーに代表される文化地理学の醍醐味は、自然人文の織りなす複合的な文化地理学の推進にある。長短さまざまな時間軸のなかで、いわば自然改変の文明史を追究することがサウアーをはじめとする多くの文化地理学者を魅了してきた課題だと信じる私にとって、ジャクソンの

主張が触れ合う場面は少ない。人文地理学と自然地理学との分離が進む社会的・政治的？状況を反映する文化現象として、本書の出現を位置づけることがゆるされよう。

(松尾容孝)